

2024年1月21日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 89 : 6~9

マルコによる福音書 14 : 36

「われらの父よ」

(ハイデルベルク信仰問答 祈りについて 問 120~121)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】 コリントの信徒への手紙二 5章 17節

【讚美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 143編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 11 「感謝にみちて」

【祈祷】

【聖書】 詩編 89 : 6~9

マルコによる福音書 14 : 36

【説教】 「われらの父よ」

<父よ>

「天にましますわれらの父よ」。これは、わたしたちがいつも礼拝の中で祈る「主の祈り」の冒頭です。「天にましますわれらの父よ」。日本の教会においては、この少し古い文語体の言葉が、今でも親しまれています。今の分かりやすい言葉にすると、「天におられるわたしたちの父よ」となります。

これから、『ハイデルベルク信仰問答』では、「主の祈り」の言葉が、一つ一つ取り上げられていきます。今日は、問 120 「われらの父よ」と、問 121 「天にまします」のところから、御言葉に耳を傾けます。

わたしたちは、イエスさまが教えてくださった「主の祈り」の恵みを、深く味わいながら、この祈りを通して、天の父なる神さまとの親しい交わりを、ますます深めていきたいと思うのです。

さて、イエスさまは、ご自分に従ってきた弟子たちに。また、イエスさまを信じて教会に集っているわたしたちに。「天にましますわれらの父よ」と神さまに呼びかける祈りを、教えてくださいました。

しかし、わたしたちが、創造主なる神さまを「父」と呼ぶ。わたしたちが、全知全能の、唯一の神さまを「父」と呼ぶ。これは決して、当たり前のことではありません。

本来このような、栄光に満ちた、聖なるまことの神さまを、親しく「父」と呼ぶことができるのは、まことの神の独り子である、イエスさまだけだからです。

まず、わたしたち人間は、神さまの被造物、造られたものに過ぎません。天も地もお造りになり、命を支配なさる神さまとは、それこそ、天と地ほどの大きな差があります。

しかし聖書には、神さまが、わたしたちを「神のかたち」にお造りになった、ということが語られています。それは、わたしたち人間が、神さまの呼びかけに応え、響き合い、愛し合い、神さまと親しい交わりをもって生きる者として造られた、ということです。

それなのに、わたしたちは、命を与えてくださった神さまに対して、罪を犯しました。

罪とは、神さまから離れること。神さまの思いに背くことです。本当は、わたしたちは、神さまと向かい合い、愛し合って生きようと招かれているのに。神さまを人生の中心として、いただいた恵みに感謝しつつ歩むべきなのに。すべての人は、その恵みを忘れ、感謝を忘れ、自分を中心にして歩んでいる。神さまを、自分のまことの唯一の神さまとしないで、他のものに心を寄せて歩んでいるのです。

わたしたちすべての人間は、神さまとの関係を、そのように自ら台無しにしてしまっています。神さまの愛から離れて、恵みから離れて、神さまから遠ざかっているのです。

そうして、わたしたちは、神さまから与えられていた「神のかたち」を、神さまとの親しい関係を、すっかり壊してしまっているのです。

でも、そのようなわたしたちに。神の御子イエスさまは、「あなたがたも、神さまのことを、神の子であるわたしと同じように、『父よ』と呼んで祈りなさい。神さまと、親子のような、親しい関係を与えられている者として、父なる神さまに語りかけなさい。」そう言って、「主の祈り」を教えてくださいました。

どうして、神さまとの関係を壊したわたしたちが、神の子のように、イエスさまのように、神さまのことを、親しく「わたしの父」と呼べるのでしょうか。

…それは、神の御子イエスさまは、まさに、わたしたちが、神さまのことを「父よ」と呼べるようにするために、天から降り、まことの人となり、わたしたちのところに来てくださったお方だからです。

<アッバ>

まず、聖書には、イエスさまが、まことの神の独り子として、神さまのことを「父よ」と呼んでおられる場面が、いくつも伝えられています。

今日読まれたマルコによる福音書 14:36 にも、こうありました。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

「アッバ」とは、当時イエスさまが使っておられた、ヘブライ語の方言である、アラム語です。アッバ、というのは、幼い子どもが父親を呼ぶときに使う言葉です。パパ、とか、お父ちゃん、という感じです。

当時のユダヤ人社会の中で、唯一のまことの神さまのことを、そんな風に親しく「アッバ」、「お父ちゃん」などと呼ぶことは、あり得ない、驚くべきことでした。

確かに、旧約聖書の中には、神さまを「父」と語っている箇所が、何か所かあります。でも、そう多くはありません。

むしろ、厳格なユダヤ人にとっては、唯一の全能の神のことを、「父」と親しく気安く呼ぶことは、神さまに無礼なことであり、怒りさえ覚えたかも知れないほどです。

でもイエスさまは、祈りの度に、神さまのことを親しく「アッバ、父よ」と呼んでおられました。これは、神さまと、真実の愛の関係にある、まことの神の御子イエスさまだからこそ、御子イエスさまにのみ呼ぶことが許された、「父よ」との呼びかけだったのです。

<天におられる>

さて、少しここで、わたしたちが、神さまに対して「父」という言葉を使う時に、地上の人間の父親の姿から、神さまのことを理解しようとしてはならない、ということを押さえておきたいと思います。

当時の「父」と、現代の「父」の在り様が変わっている、ということも勿論あります。しかし、それ以前に、地上のどのような人間も、不完全で、限界があるものです。

父らしく、子にすべての愛を注いで、守ろうとする父親がいたとしても、人間がなせることには限界があるし、決して完全ではありません。また、世の中には、父親に傷つけられる子どもたち、父親がいない子どもたちもいます。そのような人たちからすれば、「父」のイメージから、神さまとの親しい関係を思い描くことは、非常に困難なことです。

ですから、『ハイデルベルク信仰問答』の間 121 は、「われらの父よ」との呼びかけに、「天にまします」という言葉が付け加えられている意味について、こう語っています。

問 121 なぜ「天にまします」と付け加えられているのですか。

答 わたしたちが、神の天上の威厳については何か地上のことを思うことなく、その全能の御性質に対しては体と魂に必要なことすべてを期待するためです。

まことの神さまについて「父なる神」と言う時。わたしたちは、何か地上のことを一切思うことなく、天も地も超えておられる、全能の方。わたしの体と魂に必要な、すべてのことを満たすことがお出来になる、力あるお方を、思うべきである、ということです。

「天」とは、時間も、空間も、超えていることを意味します。そして、聖書には、神さまが、その「天」をも満たすお方、「天」をも超えるお方であることが、語られています。

今日の旧約聖書の詩編 89：6 にも、こうありました。「主よ、天があなたの驚くべき力を告白し、聖なるものがその集会で、あなたのまことを告白しますように。」

神さまというお方は、天を超え、わたしたちの思いを超えておられるお方です。わたしたちの想像をはるかに超えて、愛情深く、憐みに満ちた、全能のお方であられるのです。

「天におられる父なる神さま」と呼びかける時。わたしたちは、そのような、地上の思いを遥かに超えた「父」に。地上の親子の関係を遥かに超えて、まことの深い愛をもって、真実な関係を築いてくださる天の父に、呼びかけている、ということなのです。

<イエスさまによって>

さて、マルコによる福音書で、イエスさまが、この「天におられるまことの神さま」を、「アッバ、父よ」と呼んで、祈っておられた場面に戻りましょう。

これは、イエスさまが十字架に架けられる前、ゲツセマネという場所で祈っておられた時の、祈りの言葉です。

イエスさまは、この場面の後、裏切りと、理不尽な裁きと、恥と、嘲りを受け、苦しみに満ちた、悲惨な十字架の死を迎えようとしておられます。そのことに、もだえ苦しみながら。耐えがたい不安と恐れに苛まれながら。イエスさまは、父なる神さまに向かって、「アッバ、父よ」と呼びかけられたのです。

イエスさまがこれから歩まれる道は、悲しみと、不安と、恐れに覆われている道。極限の苦しみが待ち受けている道。そして、すべてが取り去られる道でした。

そのような場面で、イエスさまは、父なる神さまをこそ、呼び求められたのです。ただ父なる神さまにのみ、すがっていかれたのです。

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」
と

神の御子であるイエスさまは、父なる神さまが、愛のお方であるがゆえに、憐みに満ちたお方であるがゆえに、ご計画なされたこと、実現しようとしておられることを、よくご存知です。父なる神さまの御心を、御子であるイエスさまは、完全に知っておられます。

その御心とは、造られたすべての人間の罪を、お赦しになるということです。罪によって、神さまから離れ、滅びへ向かっていく、すべての罪人に対して。その罪の赦しを示し、ご自分の許へ再び招き、親しい交わりに生きる者へと、新しく造りかえてくださる、ということです。

つまり、神さまとの関係を、わたしたちが破壊してしまったにも関わらず、神さまの方から手を差し伸べて和解して下さり、新しい関係を結び直して下さる、ということです。

そして、まさに、そのためにこそ、神の御子イエスさまは、この地上に来られたのです。わたしたち罪人の代表となって、すべての人の罪を、ご自分お一人の命で贖うために。イエスさまは、わたしたちと同じ肉体をとって、まことの人となって、来て下さったのです。

本当は、神さまから離れ、自己中心に生きて、罪を犯したわたしたち自身が受けなければならなかった裁きを。神さまから見放される苦しみを。神さまから切り離される滅びの死を。まことの人となられたイエスさまが、すべての人間の身代わりとなって、ご自分の身に、その十字架に、負ってくださったのです。

これが、父なる神さまの救いのご計画でした。父なる神さまの、御心でした。そして、イエスさまは、この十字架の苦しみと死が、取りのけられることを願いつつも、最後には、神さまの御心が実現することを、祈られたのです。御心に、すべてを委ねられたのです。

なぜなら、神さまの御心は、まことの愛による御心だからです。神さまの御心は、深い憐みによる御心だからです。そして、神さまのご計画は、正しい、良い、ご計画だからです。そして、イエスさまは、父なる神さまは、それを必ず、実現して下さるお方であることを知っておられたからです。父なる神さまを、ひたすらに、信頼しておられたからです。

…このゲツセマネの祈りの後、イエスさまは、まことに、父なる神さまの御心に従って、十字架につけられ、死んで、わたしたちの罪をすべて贖ってくださいました。この父なる神さまの御心は、イエスさまによって、確かに成し遂げられたのです。

そして、このようにして、救いの御業を成し遂げられた御子イエスさまを、父なる神さまは、死者の中から、復活させられました。

それは、神の御子イエスさまが、まことに罪の贖いを成し遂げられ、罪にも、死にも、勝利されたことが、すべての人に、明らかにされるためです。

そして、このイエスさまが成し遂げてくださった救いを信じる者には、神さまと共に生きる、永遠の命と、復活の約束が与えられることを、確かなこととして、保証してくださるためです。

今や、この救いは、すべての人の前に差し出されています。

そして、わたしたちが、このイエスさまの十字架と復活の出来事が、自分の罪の赦しのためにこそ、成し遂げられたことであると信じ、受け入れるとき。神さまの愛によって、わたしに与えられた救いであると、信じるとき。わたしたちは、洗礼を受け、聖霊を与えられ、十字架と復活のイエスさまと、一つに結ばれるのです。

その時、イエスさまの十字架において、わたしたちは、罪を赦していただくことが出来ます。その時、イエスさまの復活において、わたしたちは、神さまと親しく交わって生きる、新しい命、永遠の命をいただくことが出来ます。

そして、神の御子イエスさまと結ばれたわたしたちもまた、神の子と呼ばれるようになるのです。わたしたちも、イエスさまと同じ身分をいただき、神さまのことを「アッバ、父」と親しく呼び、父なる神さまから、すべての恵みの財産を受け継ぐ者とされるのです。

だから、わたしたちを救うことがお出来になる、イエスさまだけが。神さまとの親しい交わりを取り戻してくださる、イエスさまだけが。わたしたちに、神さまを「父よ」と呼ぶ祈りを、教えてくださることが、お出来になるのです。

イエスさまがこの祈りを、わたしたちに教えてくださるためには、わたしたちの罪のために、ご自分が十字架に架かり、苦しみを受け、死んで、代わりに罪を贖ってくださる、ということが必要でした。

イエスさまは、ご自分の命を、わたしたちに与えてくださることを前提に、この「天にましますわれらの父よ」との言葉で始まる「主の祈り」を教えてくださいましたのです。

イエスさまが地上で成し遂げられたすべてのことは、わたしたちが、神さまのことを、親しく「父よ」と呼ぶためにこそ、なされたことだったのです。

<祈りの恵み>

…わたしたちが、「天にましますわれらの父よ」と、神さまを呼ぶ。もう、この一言を言えるということが、わたしたちが神の子とされていること。すべての救いを、すべての恵みを、すべての愛を、神さまからいただいている、ということの、確かな証しなのです。

「天にましますわれらの父よ。」この一言で、わたしたちが御子イエスさまを通して与えられた、救いの恵みが、すべて言い表されているのです。

ですから、この「主の祈り」は、当然、イエスさまなしに祈ることはできません。イエスさまの、ゲツセマネの祈りなしには。イエスさまの、十字架による贖いなしには。イエスさまの復活なしには、祈ることができないのです。「われらの父よ」と言えないのです。

わたしたちの祈りは、イエスさまに根拠があります。わたしたちが祈る時には、イエスさまが、いつも近く、共にいて、わたしたちを支えてくださいます。

わたしたちが「われらの父よ」と祈る時、わたしたちの先頭に立って、わたしたちの口と共に、あの御子イエスさまが、共に「父よ」と祈ってくださっています。

そうであるならば、わたしたちは、日々の穏やかさの中で、ただ和やかに、親しく神さまを「父よ」と呼ぶだけではありません。

イエスさまの、あのゲツセマネの祈りのように。悲しみと、不安と、恐れの中にあっても。苦しみの極限にあっても。すべてを失おうとしている、まさにその時にあっても。わたしたちは、天におられるわたしの父にこそ、「父よ」と呼び求めるべきなのです。

御子イエスさまの十字架の苦しみと死を通して、わたしたちへの愛を現わし、わたしたちを罪から救い、わたしたちをご自分の子としてくださった、天におられる、すべてを超えておられる、あの神さまに、「父よ」と、すべてのことを求めて、祈るのです。

そのような時に、わたしたちがしがみつくと出来るのは。わたしたちが、どうしようもない自らを委ねることができるのは。「天におられるわたしたちの父」の他には、何もないからです。

父なる神さまは、わたしたちが願う前から、わたしたちに必要なものをすべてご存知のお方です（マタイ 6:8）。ですから、わたしたちは、すべてを、この父なる神さまに頼る。すべてを、この父なる神さまに委ねる。

この方が、父であるというところに、もうわたしたちの恵みのすべてがあり、それは、すでに与えられているのです。だから、わたしたちは、その独り子さえ惜しまずに与えてくださった、わたしたちの父なる神さまを、ただ呼び求めればよいのです。

わたしたちは、あまりの苦しみに、「父よ」と呼ぶことが出来なくなること。心に疑いが起こり、迷いが生じ、不安と恐怖に覆われることがあるかも知れません。

しかし、それでも、祈るのです。祈らなくなことは、神さまとの交わりを拒むことです。祈れないときは、祈れません、と祈らなければなりません。

その祈りには、わたしたちのために、ゲツセマネで祈り、十字架の苦しみを受け、復活して下さったイエスさまが、いつも共にいて、支えてくださいます。わたしたちのために、命を惜しまず捨てて下さったお方が、今も、これからも、わたしたちを見捨てたり、離れたり、放っておかれることは、決してありません。

そして、このような御子イエスさまを与えてくださるほどに、わたしたちを愛してくださっている「わたしたちの父なる神さま」が。わたしのために、愛を尽くして、力を尽くして、思いを尽くして、働いて下さらないはずがないのです。

祈りは、わたしたちを神さまへと、ますます大胆に近づけます。より深い交わりへと招きます。祈りは、神さまのお働きによって。わたしの思いや、限界や、力を超えて。わたしたちを、神さまにより頼む者へ、神さまを愛する者へ、神さまの御心を求め、信じる者へと、確かに導いてくれるのです。

「天におられるわたしたちの父よ。」「天にましますわれらの父よ。」そう祈ることができる恵みをいただいていることを、深く感謝しつつ。わたしたちは、ますます親しい神さまとの交わりを求めて、祈る者となっていきたいのです。

【お祈り】 天におられるわたしたちの父なる神さま

あなたを「わたしたちの父」と呼んで祈ることが出来る恵みを、感謝いたします。

「わたしの父よ」とあなたを呼ぶとき、そこには、わたしたちの救いの御業を成し遂げて下さった、十字架と復活のイエスさまが、共にいて下さいます。わたしたちを神の子としてくださる聖霊が、働いておられます。

あなたの愛に、憐みに、恵みに、力に包まれて、「天におられるわたしの父よ」と呼ぶ幸いを、心に深く覚えさせて下さい。日々、祈ることを通して、この幸いに立ち返り、あなたに愛されている子として、生きる者としてください。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 12 「とうときわが神よ」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】 【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】 【祈祷】

【讚美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らしあなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン